

第2回：大庭の地形と変遷 ～大庭城址と湘南ライフタウン～

前回は大庭地区の歴史を簡単にご紹介しましたが、今日は大庭のランドマークである、大庭城址とライフタウンについて少し掘り下げてご説明いたします。

まず**大庭城址**です。

大庭というと平安時代後期12世紀初め頃、鎌倉権五郎景政という平氏の一族が開発し伊勢神宮に寄進した大庭御厨の話、さらにそれから約半世紀後源頼朝の挙兵で大庭領主大庭景親が平家方大将として頼朝に対抗したが敗れた話、など武士に絡む歴史が有名です。大庭城もそのころ築城されたとの伝承があります。

そこに昭和40年代の湘南ライフタウン（初めは藤沢ニュータウンと呼ばれていたのですが）の開発計画が決まり、昭和43年から5回に渡る遺跡調査が行われ、そのとき15世紀後半の遺物が発掘されました。それにより室町時代中頃、太田道灌のいた扇谷上杉氏の居城跡とされました。現在確認される城構えの規模などから、道灌の数十年後の1512年に、大庭城の扇谷上杉氏を破り、玉縄城を造った小田原北条氏の改修によるものと考えられています。頼朝と戦った大庭景親の築城の証拠は出ていませんが、無かったと云う確認もされていません。

さて大庭城址の貴重なことは、県内沢山ある中世の城跡が、開発で失われつつある中で、掘立柱住居跡や掘り割りが残され、かつ市の保有地であり今後も残される存在であることの様です。

城址は公園になり立派な管理事務所には、発掘の様子や、近郷の城址の説明パネルなどが展示され、開発前の地形の模型も有り、是非ゆっくり見て、パンフレットをもらって城内を散策されてはどうでしょうか。



開発前の大庭城址の模型（管理事務所展示）

次に大庭の地形や村の変遷などについて、お話しいたします。

旧大庭地区の地形は、西南部が起伏のある高座丘陵でその陸地化は約13万年前、谷戸の発達した古い地形で、その他は約8万年前に陸地化した平坦な相模野台地です。東側を南北に引地川が流れ大きな沖積地を造り、大庭千石といわれた田圃地帯になっています。北西部から支流の小

出川が引地川に合流し、その合流点の北の舌状台地が大庭城になります。江戸時代の集落は台(だい)・谷(やと:谷の一字)・入(いり)・小系・折戸・稲荷の6ヶ所で面白いのは、それぞれの地頭が異なり6給の地となっていることです。市内でも6人の領主の相給(あいきゅう)というのはめずらしいです。もっとも稲荷集落は江戸前期に独立し一つの村となっていますが、これも又面白いことに大庭城址は江戸時代初めから藤沢宿の飛地にされ、宿の人の畑となっていました。

明治22年の市町村制では、大庭・稲荷・羽鳥・辻堂が合併し明治村となり、明治41年には鶴沼村と共に藤沢町に合併しそのまま昭和15年藤沢市になっています。

大庭城址と共に大庭を代表する憩いの場所が引地川親水公園です。今公園の駐車場の入口に昭和38年建立の記念碑がひっそり建っています。以前は県道藤沢厚木線からの入口に立っていました、昭和8年から引地川の河川改修による土地改良事業の記念碑です。そこには「昔から幅員狭小、屈曲甚だしく、為に流域耕地は河川氾濫稲作被害累年に及ぶ引地川の改良工事、登記事項一切終了」と書いてあります。この碑は篆額・撰文並びに書を当時の藤沢市長・金子小一郎が書いています。実は、この引地川の改修については明治34年金子市長の祖父 金子小左衛門が手がけていました。県下でも他に先駆けた取り組みと云われています。金子家は大庭の入村の名主を務める旧家で、実家はこの近くです。小左衛門は羽鳥 小笠原東陽の耕余塾を補佐、自由民権運動で活躍、子の角之助も耕余塾に学びました。北の谷共同墓地にある小左衛門のお墓は板垣退助の添額です。親子3代にかかわる引地川改良記念碑といえます。引地川親水公園は平成9年供用開始となっています。



引地川親水公園の土地改良事業の記念碑

さて、もう一つの文化遺産とも云えるのが、**ライフタウンの街造り**です。

藤沢市に於ける大庭地区は、市内公民館ベースの13地区区分の中で湘南大庭地区とされ、その範囲は東が引地川、南は芙蓉カントリーまで西は茅ヶ崎市、北は遠藤・石川を境とします。昔とは出入りが有り、まず引地川の対岸の北部(持瀬・聖ヶ谷・唐池)の集落や南側の稲荷、また折戸も大庭地区でした。一方北部の遠藤や石川の一部がライフタウン計画におり込まれ、また西部の茅ヶ崎市も一部おり込まれて大庭公民館の管轄になっています。

藤沢市の「西部土地区画整理事業」と茅ヶ崎市の「堤地区土地区画整理事業」により誕生した湘南ライフタウンは、総面積 340.7ha、計画人口 45,000 人。事業着手は昭和 46 年で、完了は平成 4 年。減歩率（土地所有者から無償提供）は 30%が適用されました。

設計は有名な**建築家・故黒川紀章氏**が担当し、開発コンセプトとして農業との共生（農地の 50%を買い上げる交換方法で、住宅・商業地区と農業地区の集中化）、自然との共生（等高線に沿って幹線道路を設置）、車と歩行者の共生（交差点は T 字路など）掲げて開発されました。30 年経った今もその先進性は感じられます。とくに交差点が全て T 字路は、藤沢市内の他地区と比べて交通事故の発生が低いとされています。中心にありシンボルとなっている湘南大庭市民センター、昭和 60 年開館は、鳥が大きく羽を広げたような建築で、これも高名な女流建築家・長谷川逸子(いっこ)氏の設計です。平成 12 年には湘南大庭市民図書館も隣に開館しました。